

司式: 佃 雅之

奏楽: 橋本恵美子

前奏: 「キリストは死の縄目につきたまえり」(G.P.T. テレマン)

招詞: これは主の御業、わたしたちの目には驚くべきこと。今日こそ主の御業の日。今日を喜び祝い、喜び躍ろう。(詩 118:23-24)

讚美歌 6「つくりにしを賛美します」

交読詩編 16:7-11

- 07 わたしは主をたたえます。主はわたしの思いを励まし／わたしの心を夜ごと諭してくださいませ。
- 08 わたしは絶えず主に相対しています。主は右にいまし／わたしは揺らぐことがありません。
- 09 わたしの心は喜び、魂は躍ります。からだは安心して憩います。
- 10 あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく／あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず
- 11 命の道を教えてくださいませ。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い／右の御手から永遠の喜びをいただきます。

イザヤ書 65:17-20

- 17 見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。初めからのことを思い起こす者はない。それはだれの心にも上ることはない。
- 18 代々とこしえに喜び楽しみ、喜び躍れ。わたしは創造する。見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして／その民を喜び楽しむものとして、創造する。
- 19 わたしはエルサレムを喜びとし／わたしの民を楽しみとする。泣く声、叫ぶ声は、再びその中に響くことがない。
- 20 そこには、もはや若死にする者も／年老いて長寿を満たさない者もなくなる。百歳で死ぬ者は若者とされ／百歳に達しない者は呪われた者とされる。

ヨハネによる福音書 20:24-29

◆イエスとトマス

- 24 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。
- 25 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」
- 26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけあつたのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。
- 27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」
- 28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。
- 29 イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

天地の創造主にして全能なる活ける真の神、あなたの聖名を褒め称えます。あなたは先にお献げしました復活日の礼拝において、私たち一人ひとりに、“おはよう！” “喜びなさい！” と声をかけてくださり、“復活の希望を宣べ伝えるために走り出すように” と私たちを派遣してくださいました。あなたの計り知れないご計画と、限りない恵みを心から感謝致します。また、今日の礼拝までの歩みを、あらゆる良き力で満たしてください、愛をもって私達を養い、導き、支え、励ましてくださいましたことを覚えます。

けれども主よ、私たちの歩みは、なんとあなたのみ心から遠くあつたことでしょうか。互いに愛し合うことに乏しく、言葉と行いとにおいて人を傷つけ、自分自身の事ばかりに捉われて過ごした日々であつたことを告白致します。あなたが私たちの一つひとつの行いに目を留め、裁かれるのであれば、私たちは誰一人あなたの御前に立つことはできません。

神様、それでもあなたはそのような私達であることを知りつつも、この礼拝へと招き、悔い改めの時を与えてくださいました。この礼拝の中で祈りを献げ、み言葉を聞き、あなたを賛美することを通し、私達を新しい者へと変えてください。イエス・キリストを主と告白し、闇から光へと方向を転換して、新たに生きることができるようになってください。

今も生きて働かされている神様。あなたの平和で、この地上をご支配ください。世界は今、大きな闇に包まれています。どうか、あなたご自身が憐みの主として介入してください。戦争という脅威の中で苦しんでいる人達をあなたの慰めと励ましの御力でお守りください。戦争には勝者はないことを、全ての人が、全ての国の為政者達が知って、受け入れることができますように。私達一人ひとりが、あなたの平和の使者として、あなたの平和のご支配の為に働くことができるようになってください。そのために、キリストの名による全ての教会が、喜びの知らせを、あなたの福音を大きなものとする事が出来ますように励ましてください。

私たちの主よ、この教会の新年度の歩みを祝してお守りください。教会で行われる全ての事が、み旨に適うものとなりますよう、必要な働きをお示しください。そして、私たちのその働きによって、あなたのみ名が崇められ、ますます福音の光を照り輝かすことができますように。

神様、今日この場の礼拝を共にできない兄弟姉妹達のことを覚えて祈ります。様々な困難な状況の中にある友、深い悲しみの中にある友、生きる力と希望を失っている友のために祈ります。あなたが聖霊によって臨み、そのお一人、お一人に、その時にあつて必要な慰めと励ましを、どうか豊かに与えてください。

神様、今朝、あなたが立てられた説教者、笠原義久牧師を感謝致します。あなたが笠原牧師の健康を守り、聖霊が今日この礼拝へと導いてくださいました。今日、ここで語られます十字架と復活のメッセージを私たちが全てをあなたに明け渡して受け取ることができますように、語る牧者と聞く私たち聖霊を下し、聖霊によって一つとしてください。

主よ、今朝、日本の、そしてまた世界の各地で献げられている礼拝が、あなたへの感謝と賛美に満ちたものとなりますように。

これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌 327「すべての民よ、よろこべ」

講壇「悲しみを担う復活の主」 笠原義久

私達は今、復活節という喜びの時の中に置かれています。復活節が喜びであるのは、イエス・キリストが私達の主として今も生きて働いておられるという出来事を徹底して告知らせているからです。私達の魂も体も、つまり私達の存在全体が、また、この世界も全て、今生きて働いておられるイエス・キリストのご支配の下にあるということが明らかに示されているからです。

お読み頂いたヨハネ福音書は、「ディディモと呼ばれるトマス」について記しています。彼は、他の弟子達からキリストの復活の証言を聞いても、「あの方の手に釘の跡を見、この指をその釘跡に差し入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」そのように言いました。この“信じないトマスに復活の主が会われ、トマスの不信を打ち砕かれた”というのが、この個所の趣旨でしょう。確かに主は、私達の、信じない私達、私達の不信によって墓の中に閉じ込められるような、そういう御方ではなく、逆に復活の主が私達の不信を砕かれる、そのことをここからの聞くことができます。

トマスに起こったこの突発的ともいえる事件について、私達は先ず次の事によくよく注意して聞く必要があります。すなわち“復活の主は、あの十字架で死んだイエスその人である”という告知知らせです。ゴルゴダの丘の十字架上に死んだイエスと、復活のキリストとが同じ人物であるかどうか、同じ実質を持っているかどうかということ。それは一番最初期の教会に強く、また根深くあった疑問であったようであります。今日のこのトマスの記事は、そのような“十字架に死んだイエスと復活のキリストが同一人物であるかどうか”、その疑問に対する一つの答えだと、一つの答えというよりも、“決定的な答えだ”とそのように言うことができるでしょう。

トマスはかねてより、他の弟子たちの信じやすさというものに或る種の違和感を覚えていたフシがあります。ですから、他の弟子達から復活の主が現れたというその出来事を聞いたとき、トマスは“手を脇腹に入れてみなければ決して信じない”と、力んで断言したのであります。

復活のキリストが十字架に死んだイエスその方であると言うことは、私達は疑いのない信仰の常識のようなものになっています。そして、そのことに何の驚きも感じなくなり、この出来事の持っている深い意味も、そしてまたその力も、私達の魂を揺り動かす衝撃として受け取れなくなっているというのが、私達の実際の姿ではないでしょうか。トマスのこの記事は、そのような私達の常識を鋭く問うています。ヨハネ福音書は、十字架の傷跡の鮮やかな復活の主イエス・キリストと、この主に見えた弟子たちの驚きと喜びという最初の衝撃へと私達を連れ戻そうとして

います。「あの方の手に釘の跡を見、この指をその釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」そのように言うトマスに主は、“あなたの指をここにあってわたしの手を見なさい”、また、“あなたの手を伸ばし、わたしの脇腹に入れなさい”とそのように言われました。この主イエスの言葉は、今、私達に語りかけられている言葉ではないでしょうか。主は、あの日、弟子たちにご自身を顧されたように、今、私達に聖霊においてご自身を顧しておられます。私達もトマスのように、その手の傷跡を見、脇の傷に触れ、“私の主、私の神よ！”と言うことが赦されています。これは啓示、あるいは聖霊の働き呼ぶほかないそういう出来事です。聖霊の働きによる出来事ですから私達もまた、弟子たちが主を見て喜んだように喜ぶことができると、そのように言われているのではないのでしょうか。

私達が今置かれているこの復活節において、過ぎた受難節を思い起こし、改めて十字架に目を向けるということは、私達の信仰の本質に属することだと思います。十字架と復活が切り離され、復活節と受難節とが切り離されるなら、それはもう聖書を告げる信仰ではありません。復活節の時の中に置かれている今、“あなたの指をここにあって、わたしの手を見なさい”、また“あなたの手を伸ばし、わたしの脇腹に入れなさい”という主の言葉に促されて、十字架の主に目を向け直してみたいのであります。

さて、イエスが地上でのご生涯の最後の日、深夜、3人の弟子を連れてゲッセマネの園で祈っておられた時の言葉がマルコ福音書の中にあります。

「わたしは死ぬばかりに悲しい」(マ14:34)

ここには恐ろしいまでの深い悲しみがあります。言葉に表せない苦悩にまみれた悲しみがあります。主は弟子たちに呻くように、ご自分の魂の深みからの嘆きを披瀝しているのです。主イエスの十字架は私達にとって、贖い、即ち、私達の罪が赦される、罪赦されるという、そういう出来事でありましたけれども、主にとっては、“死ぬばかりの悲しみの出来事であった”と、そのように言うことができると思います。十字架が主イエスにとって苦しみであったのは勿論のことですが、しかし主の魂の深みにおいては、それは肉体的、精神的な、あるいは、霊的な苦しみを超えた悲しみであったと言わなければなりません。マルコ福音書が“私は死ぬばかりに悲しい”、このイエスのみ言葉を記しているのは、弟子達と、そしてその後続く教会に、“この主の極みにおける悲しみを覚えよ”と、そのように言わんとしているからではないのでしょうか。“このわたしを見よ”、“わたしの悲しみを覚え、心に留めよ”ということではないのでしょうか。

トマスに手と脇腹を示された主を、“わたしは死ぬばかりに悲しい”というこのマルコ福音書が記すところと重ね合わせ時、主はその傷を示されることによって十字架の悲しみを示し、その悲しみを分け与えようとして示されているのではないか、そのように思えてなりません。

それにしても、主イエスのこのような苦しみと、その苦しみの果てにある悲しみは一体どこからくるのでしょうか。勿論、主イエスは人間イエスとして、様々な労苦や悲しみを負われたに違いありません。しかし、

聖書が“自分は死ぬほどの悲しみを負っている”というふうに記す時、それは“人間的な悲しみを超えてイエスの悲しみが特別な様相と由来を持っていた”と、そのように言うべきでありましょう。

まず、主イエスの悲しみの一つは、神の御意思を担っている者としての悲しみです。主イエスは「神の言葉」とヨハネ福音書では言われています。イエス・キリストは、神を啓示するお方である、“神のご本質、つまり神がどういう方であるのか、そのことはイエス・キリストを見れば分かる”、それがイエス・キリストは神を啓示するお方であると言うことでありますけれども、神を明らかに示すお方としての主イエスの悲しみは、この神の御意思を担い、それを成すために、この人間世界に置かれている者の悲しみです。

主イエスは、神の救いをもたらすために私達のもとに来られました。しかし、主イエスがそこで受けたのは、一番親い弟子たちの無理解、この世の激しい敵対、そして、ついには十字架の死を死ななければならないという苦しみの極みを負うことでした。そして最後はあの十字架上での叫び、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか(詩 22:2、マタ 27:46、マコ 15:34)」、神から見捨てられるという経験をしなければならなかった。このように、神の御意思を担い、そのために働く者の悲しみ、それが主イエスの第一の悲しみでした。

主イエスの第二の悲しみ、それは私達のこの世における悲しみを担い、私達に代わってそれを引き受けられたその悲しみです。イザヤ書 53 章、あの『苦難の僕の歌』は次のように記しています。「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ/多くの痛みを負い、病を知っている。(イザ 53:3a)」、彼はそのような悲しみの人であった。なぜ、悲しみの人であったのか? 「彼が担ったのはわたしたちの病/彼が負ったのはわたしたちの痛みであった(同 4 節 a)」。そして更にこう続けます。「彼が刺し貫かれたのは/わたしたちの背きのためであり/彼が打ち砕かれたのは/わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって/わたしたちに平和が与えられ/彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。(同 5 節)」、即ち、苦難の僕であるイエス・キリストの悲しみは、私達一人ひとりと、また、この世界の不義や罪、咎、そこに根差す一切の悲しみをまともに全部担った、その故の悲しみだと、そのように言うことができます。

私達はどうしてもキリストによる贖い、即ち、罪の赦しということ。そして、その恵みを命の無い無機的で、また機械的なものにしてしまいがちです。しかし、それでは福音ではありません。何ら生きた力とはなりません。私達が、私達のための十字架の主の苦しみ、悲しみに目を開かされるという主との命の通い合いがなければ、それは福音ではありません。私達の目が向けられなければならないのは、主の十字架ではなく、十字架の主です。十字架の主は、私達人間の根源的な悲しみを、私達に代わって担い、私達と世界の救いのために意思(?)される方です。私達の罪に由来する、また、罪と離れ難く結びついている悲しみ、私達が存在することの労苦と、それに伴う一切の悲しみ。それらは私達に代わって負ってくださって主は十字架に付かれました。そのようなお方として復活し、今生きて働いておられます。

私達は、この主によって一切の悲しみを担われた者達です。私達の日常には、いろいろな形をとった悲しみがあります。私達の多くの日常的なことは、悲しみと共にあると言っても過言ではありません。更に、それらを辿って行くと、私達の悲しみの一番根っこにあるところにあるものは、私達が主の力、乃至、主の力と呼ぶしかないものに押し潰されるようにして私達が喘いでいる、そういう者達だからです。命の瀬戸際に立たされている者、老いの寂寥を如何ともし難く感じている者—この私も正にその一人に他なりませんけれども—あるいは、他者との間に深い癒し難い分裂を抱え込んでいる者、また自分自身の中に、どうしても埋めることのできない分裂を抱え込んでいる者、これが私達です。“人間は悲しみの存在、悲しみと共にある他ない者だ”と、そのように言うことができます。主イエスは、私達人間のそのような悲しみを担ってくださいました。真に些細な悲しみも、直ぐに纏わる存在である事に係る悲しみも全て担い、そして十字架につけられたのです。

私達は、このように主によって悲しみを担われた者です。そのような者として、いや、そのような者であるからこそ、今度は翻って主に従う者として悲しみを担う者となるようにという勧めを私達は受けていないでしょうか。聖書が語る神のみ言葉を聖霊の働きによって確かに聞き取り、そのように生きる者とされるということは、この時代や隣人の悲しみを分け与えられて共に生きるようにされるということです。他者の悲しみを分かち合えるそういう愛の心を持つ者とされたいのです。今、私達が復活の主を喜ぶということは、私達の罪が担われ死が討ち滅ぼされ、悲しみが負われたということであり、同時に、“世の悲しみを担う者になれ”というそういう勧めを私達が聞くということではないでしょうか。

ヨハネ福音書でトマスが、主の傷に目を留め、そこに触ることが赦されたと言うことは、このキリストによって遣わされるということの意味します。信じることのできない存在であるトマス自身の悲しみが、その傷を示されたキリストによって担われる、そのことによってトマスはキリストの悲しみに与ることを赦され、他社の悲しみを担うために遣わされる、そういうことが、ここで起こっているのではないのでしょうか。

十字架において、私達の罪を贖い、悲しみを担って下さったお方は、復活され、生きて働いておられる主イエスそのお方です。私達はこの主に対して、トマスと共に、「私の主、私の神よ!」と言う声を上げ、トマスのように新しく正せられたい。そして、主の担ってくださいました悲しみを分け与えられた者として、夫々の馳場を走る者とされたいと、そのように願います。祈りましょう。

主なる御神様。この時の中で私達を治め、動かし、充たしているものは、あなたの真実なみ言葉であること。み言葉が私達全てを慰め、勇気づけ、励まして下さることを信じさせてください。私達は、あなたに希望を抱きます。私達はあなたに信頼を献げます。あなたが御子キリストのご復活によってお始めになった御業を必ず終わるまで全うされることを信じ祈ります。主イエス・キリストの聖名によって、アーメン。

讚美歌 516「主の招く声が」

献金・感謝・主の祈り(野呂智子)

全能の父なる御神様。あなたのお名前を賛美致します。先週、イースターの礼拝をお献げし、復活の主に見えた大きな喜びを頂き、この1週間を歩んでまいりました。そして今日、敬愛する笠原牧師より、悲しみを担う、悲しみの内に、十字架の苦しみを味わわれたイエス様のお苦しみを通して、私達が他者の苦しみ、悲しみを担う者として生まれ変わらせて頂きましたこと、その復活の本当のメッセージをお聞きすることが赦されました。本当にありがとうございます。このみ言葉を糧に、また、新しい日々を歩んで参ります。心より感謝申し上げます。

私達は、神様より豊かな恵みを頂いております。その恵みのほんの一部ですが献身と感謝のしるしとして、御前にお献げ致します。どうぞ教会のご用のためにお使い下さい。

イエス様が教えてくださいました「主の祈り」を共に祈り、新しい日々を歩ませてください。…「主の祈り」アーメン。

派遣: 讃美歌 88「心に愛を」

祝福: 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の清き親しき交わりが、とこしなえにあるように、アーメン。

報告: (1)笠原先生、3年ぶりの講壇。(2)新年度委員会等・担当アンケート提出(本日まで)。(3)組織新しい教友制度運用について(牧会委員会)。

後奏: 「グローリア」(F. ケーブラン)